

令和3年度 兵庫県立こばと聴覚特別支援学校 学校評価自己評価結果(成果と課題・各部評価・校内評価)						
<p>(ア) 聴覚に障害のある幼児の総合的な発達を促すための教育的支援を行う。</p> <p>(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら一人一人のニーズに応じた教育を行い、幼児の個性と能力の伸長を目指す。</p> <p>(ウ) 愛情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。</p> <p>(エ) 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促しつつ、視覚情報も効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活かし、幼児が基礎的な言語を獲得できるようにする。</p> <p>(オ) 豊かな生活体験を通して基本的な生活習慣の確立をはかり、幼児自身が直面するであろう障害に基づく困難を乗り越え、自立し社会参加できる将来像へと導く。</p> <p>(カ) 地域におけるセンターの機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。</p>						
自己評価基準 A 達成している B おおむね達成している C あまり達成していない D 達成していない						
学部・分掌	学校経営の重点			評価		
	各部の実践目標	成果と課題	各部評価	校内評価	校内評価グラフ	
保育相談部	(ウ) 愛情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。					
	季節の移り変わりを感じられる年中行事を意図的に保育に取り入れ、保護者と幼児と一緒に楽しむ中で、コミュニケーション意欲や主体的に物事に関わろうとする力を育む。	虫捕り、水遊び、秋まつり、野菜の収穫、クリスマス、鏡餅作り、笛分など、季節を感じられる活動を計画し、親子で楽しんで参加してもらえた。様々な経験を通して、子ども達が意欲的に保育に参加できた。学校での取り組みが家庭での親子の遊びにつながるよう、さらに丁寧に支援していきたい。	B	A		
幼稚園部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の総合的な発達を促すための教育的支援を行う。					
	集団で楽しめる活動や異年齢の交流だからこそ学べる経験を増やすために、感染症対策を行いながら異年齢での保育活動を行う。 また、こばとの自然環境の良さを活かして、四季折々の植物や虫、畑などに親しみ、自分たちで発見したり、観察したり、収穫する楽しさを感じられるようにする。	異年齢で集まる機会を設け、運動遊びや、校外の散歩を行った。交友関係が広がり、集団の中で得るものや、年長児としての自覚を促すことができた。豊かな自然の中で、子ども自ら様々なものを発見し、言葉を育むことができた。	A	A		
自立活動部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら一人一人のニーズに応じた教育を行い、幼児の個性と能力の伸長を目指す。 (エ) 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促しつつ、視覚情報も効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活かし、幼児が基礎的な言語を獲得できるようにする。					
	個々の発音の実態に合わせ、楽しみながら意欲的に取り組めるような発音個別や発音遊びを行う。また聴能担当やクラス担任との連携を深め、生活の中にも発音練習を取り入れ、確実な定着を目指す。	子どもが楽しめるような教材や題材を使いながら指導を行うことで、発音要領の獲得や呼吸の習熟に近づけることができた。また聴能担当やクラス担任と情報共有し、発音指導や保育での取り組みを活かすことができた。	A	A		
	個々の実態に合わせながら、音楽やリズムを楽しむことで聴覚の活用を促し、音を楽しめるよう支援する。	発達段階に合わせて、リズム曲を選択し、ピアノに合わせて体を動かす活動を行った。実態に応じて、ローゼンマイクを活用したり、和太鼓の音の合図を入れている。音に合わせて体を動かすことを楽しめた。	A	A		
	聴能個別の時間等を利用して聴能評価を行い、担任や発音担当者や情報を共有し、適切な支援につなげる。	子どもたちへの適切な支援につながるよう、聴力測定、語音明瞭度、発音明瞭度などの聴能評価を行い、情報交換会等の時間を利用して、担当者間で情報共有を行うことができた。	A	A		
相談センター部	(カ) 地域におけるセンターの機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。					
	難聴児の保護者に対して関わり方等具体的方法を伝え、難聴に対する理解が深まる支援を行う。支援の内容を書面で残して保護者や関係機関と共有し、充実した早期支援を目指す。	0歳児集団教室では、関わるのポイントを書いたり、ミニ研修の資料を配布したりして書面で共有した。絵本の選択について質問があったので、年齢に応じた絵本リストを作成し、保護者と共有した。関係機関に対しては、手紙を書いたりして連携をとってきた。個々に応じた支援を行っているが、書面での共有という点では充分とは言えず、支援の更なる充実を図り、書面に残して活かしていきたい。	B	A		
総務部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の総合的な発達を促すための教育的支援を行う。					
	学校における儀式や行事等の立案に関し、文化的教育、防災教育を中心に幼児にわかりやすく、興味や関心を促せるよう計画し、スムーズな運営ができるよう努める。	儀式や行事では幼児の発達にあつた分りやすく、興味や関心を持つ内容になるよう計画し、実施することができた。感染症の影響による実施方法の変更等に適宜対応したが、更にスムーズな対応ができるよう努めたい。	B	A		
学部・分掌	学校経営の重点			評価		
	各部の実践目標	成果と課題	各部評価	校内評価	校内評価グラフ	
教務部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら一人一人のニーズに応じた教育を行い、幼児の個性と能力の伸長を目指す。					
	・本校における『道徳教育全体計画』に基づいた個別の指導計画を作成し、日々の保育を実践していく。	担任に向けて『道徳教育全体計画』に基づいて個別の指導計画を作成するよう、毎年度当初に在った。領域「人間関係」等の目標をたてる際に参考にできた。来年度は『道徳教育実践表』を見直し、段階的にまた継続的に保育を実践できるよう周知する。	B	B		
生活・保健部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の総合的な発達を促すための教育的支援を行う。					
	望ましい食習慣の形成を目指し、幼児の食に関する興味や関心を育てるため、季節や行事に配慮した給食の実施や野菜等の栽培活動を旨めた食に関する体験活動の機会を設ける。	野菜の栽培や、皮むき等を通して、野菜ができて様子や、野菜の姿を知ることで、興味を示していた。カットを楽にしたことで、食品から料理になるまでの過程を知らせることが困難だった。	B	A		
	2階保育室ロッカー右側の壁面およびロッカー上部の壁面に幼児の作品を展示する。また(保育で取り組んだ製作活動を振り返って親子で話したり、他クラスの作品や活動の様子を知ったりする機会にしていこう)という展示の目的を保護者に伝える。	展示された絵を子どもが指さして自分のほだれかを知らせたり、他クラスの作品を「これ何」と質問したりして親子で話をする様子が見られた。ロッカーの上に展示した立体作品は子どもの目線より高く、見にくいものもあったので、今後、展示方法を工夫する必要がある。	B	A		
	(オ) 豊かな生活体験を通して基本的な生活習慣の確立をはかり、幼児自身が直面するであろう障害に基づく困難を乗り越え、自立し社会参加できる将来像へと導く。					
	横断歩道の渡り方や、チャイルドシートの重要性などについて、親子参加の交通安全教室を実施する。加えて、日々の交通安全指導を通して、事故を未然に防ぐための安全な方法について、幼児や保護者に理解を促す。	交通安全教室を終え、1週間敷地内に模擬信号機を設置したところ、多くの親子が手を挙げて、信号と左右を確認してから信号を渡る姿が見られるようになった。更なる定着のために定期的な声掛けなどを検討していきたい。	B	A		
	幼児自身が自分のからだや健康に興味や関心をもち、病気の予防や基本的な生活習慣を身に付けることができるよう、健康教育や自衛的な活動の中で年齢にあわせて支援していく。また、幼児期の健康について(弱子予防、歯と口の健康など)学校医、家庭と連携し、健やかな成長・発育を促す。	「はげんのおはなし」では、幼児自身がからだや健康についての話に興味を持ち、楽し取り組んでいる姿がみられた。しかし、感染症予防の観点から実施のほがきやういなどの練習はできなかった。昨年度未実施であった学校医の講話は実施することができた。今後も学校医、家庭との連携体制を整えていきたい。	B	A		
研究部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に合理的な配慮をしながら、一人一人のニーズに応じた教育を行い、幼児の個性と能力の伸長を目指す。					
	保育相談部では「ふりかえりシート」を活用しながら保護者と幼児の関わりについてのポイント話し合い、保育で実践する。幼稚園部では毎月で取り組んだ保育の内容、ねらい、指導方法や使用教材等をまとめることで、聴覚特別支援学校での指導に必要な力を培い、高めることを目指す。	保育相談部では「ふりかえりシート」を使って保護者が自分自身の関わりをふりかえりやすくなった。幼稚園部では「教材バンク」として各月の保育をまとめ、指導方法などを共有できた。今後さらに活用し、日々の保育を考慮、指導の際に役立てたい。	B	A		
	(ウ) 愛情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。					
	保育相談部では幼稚園参観や幼稚園保護者の話を聞く研修、幼稚園で聴覚特別支援学校や聴覚学級についての話や本校卒業生保護者の話を聞く研修を企画し、保護者が聴覚障害児の将来像を見据えた上での、親子関係や子育てについて考えることができる機会を設ける。	昨年度と比べ、各部で進路先の話や体験談を開き、積極的に質問をするなど、保護者が子どもの卒業後の姿をイメージして今後の子育てについて考える機会を設定できた。	B	A		